

〔翻 訳〕

マルクスの „筆跡“ の研究

——君の悪筆に再びお目にかかれて非常に嬉しかった——

Prof. Dr. Heinrich Gemkow .

尼 寺 義 弘 訳

は じ め に

この論説は DDR（ドイツ民主共和国）の „Das Magazin“—1983年3月号—に掲載されたハインリッヒ・ゲムコー教授のものである。周知のように教授はベルリンのマルクス・レーニン主義研究所の所長代理をされ、MEGA（歴史的批判的なマルクス・エンゲルス全集—略称メガ）刊行に努力を傾注されている。原題はエンゲルスのマルクス宛への手紙のなかの一部分、》Ich war verdammt froh, Deine Kratzige Pfote wieder zu sehen 《「君の悪筆に再びお目にかかれて非常に嬉しかった」》をそのまま用いている。本訳文ではそれを副題とした。貴重な資料の提供をうけまた原文にはない末尾の注を作成するうえでゲムコー教授はじめ同研究所の多くの方々さらに日本の村田陽一先生にいろいろとお世話になったことをここに記し謝意を表したく思う。また訳出にあたり貴重な御意見を頂戴した Humboldt 大学の H. J. Petter, K. Reimann そして東京の DDR 日本大使館の公文等氏に厚く御礼申し上げる。この研究は1983年4月より一年間ベルリンとアムステルダムを中心に海外研修を行った成果の一部である。慣れない外国での生活であったが多くの親切な友人たちに助けられて研究センターの有意義な生活をおくることができたこともつけ加えておきたい。

このさわやかな真心の込められたしかも飾りけのない露骨な所感フリードリヒ・エンゲルスがカール・マルクスに宛てた1863年12月3日付の手紙に見られる。第三者への手紙ではエンゲ

ルスはより礼儀深く表現している。彼はマルクスの „悪筆“——それは Duden が „謎のような、解読するのに困難な筆跡“——と言い換え、ライプティヒで出版された同義語辞典では „なぐり書き“——と言い換えられている——について述べているのである。

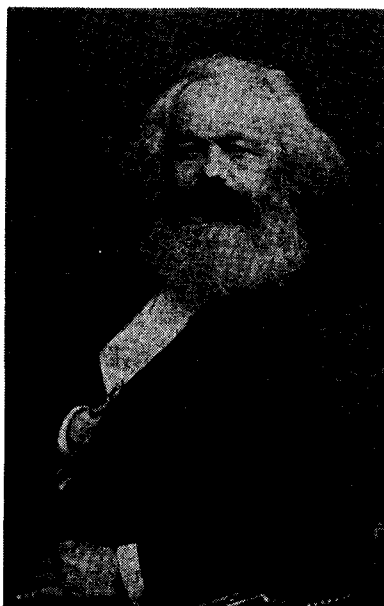
いずれにしてもマルクスの筆跡はその学生時代より彼の原稿や手紙の読者を事実非常に悩ませて来たし、悩ませている。というのもカール・マルクスの分献上の遺産は一切合財が、それが印刷されていない場合は、彼の生きていた時にはまだ普及していなかった活字ではなく手書きのまま我々に引き継がれたわけであるから、それはきわめて今日的な問題なのである。科学的共産主義の創始者の精神的遺産を科学的に厳密に、きちょう面すぎるほど厳密に出版をしようと努力している人々すべてにとって焦眉の問題である。

こうした人々は今日おもにベルリンとモスクワに、小グループではイエーナとハレに、同様にライプティヒとミュールハウゼンに、時には訪問という形をとるがアムステルダムやロンドン、トゥリイヤーやミラノ、パリや東京に居て研究している。というのは原稿は、その範囲はきわめて異なるが、メモや抜粋のある紙片、論文や著作の一部そしてまた例によって手紙類という形で、そこにさらに他のところにも存在するからである。そして我々は性急にざっと書いた乱筆の筆跡——それも訂正や下線をおびただ

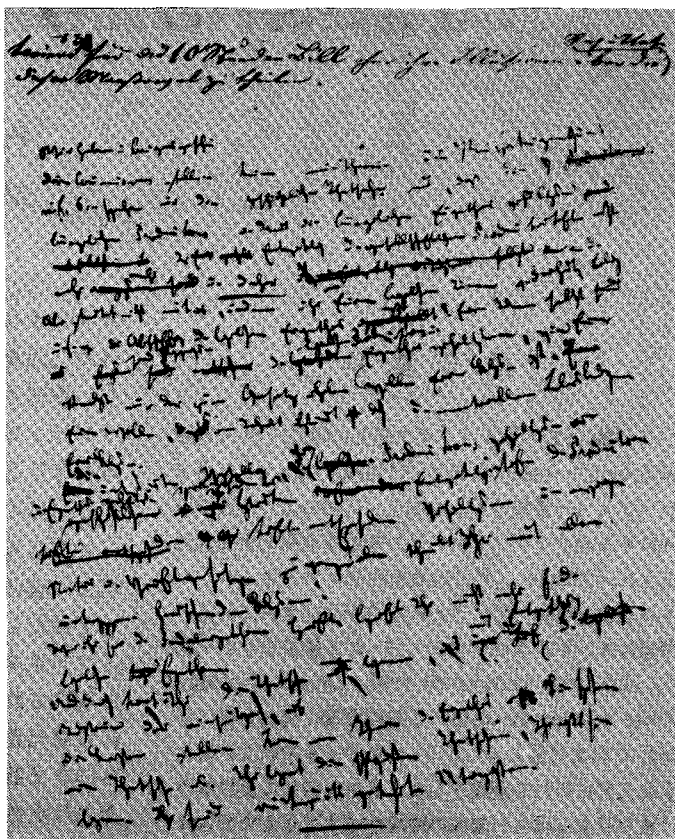
しくともなっていることがしばしばあり、それはめずらしいことではない——にいたるところで出会う。このことは誰でもこうしたページの写真とかコピーからよく知っていることである。

とはいえ時にこみ入った原稿のページは純金を、もちろん観念的な意味においてであるが、すなわち思想や推論や認識や、また自然や思惟やなかでも社会の発展の合

法則性にかんする天才的な、それゆえ初めての見解を含んでいる。この金を試掘するためには罫と篩ではなくて、しっかりとした理論的なそ



カール・マルクス 1875年 ロンドン



„共産党宣言“の保存されている唯一の原稿ページ。上段二行はジェニーのもの、その他の本文はカール・マルクスの手になる。

A	a a a a a a a a a a	34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44
a	a a a a a a a a a a	34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44
	a a a a a a a i i i i i i i	25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36

1860—67年の手紙から、カール・マルクスのドイツ字体の筆記体の筆跡学的分析

して伝記的な知識と鋭い目と良質の拡大鏡と豊かな経験とがもちろん必要である。今日ベルリンのローザ・ルクセンブルク・プラッツにあるカール・リープクネヒト・ハウスとモスクワのウィルヘルム・ピーク通り4番地にある建物の仕事場に、つまりドイツ社会主義統一党中央委員会およびソ連共産党中央委員会付属の各マルクス・レーニン主義研究所のそれに、そしてその他の場所にある仕事場に一つを加えるならば、これらの原稿から非常に多くの巻——これまでに18巻を数え<sup>2)</sup>、将来は100巻をこえる——が、すなわち歴史的批判的なマルクス・エンゲルス全集が、簡単にいってメガが生み出されている。

だがなぜマルクスとエンゲルスの原稿の出版が今なお問題となるのか。DDR で15年まえから出版されている40巻をこえる著作集や、いろいろな精選集や、幾百万人に普及しているマルクス主義の創始者の個々の著作では充分ではないのか。然りであるとともに否である。それらの著作は日常的政治的な・イデオロギー上の仕事に、さらに広い範囲にわたって科学的な研究にも充分である。だが精神的巨人である二人の巨大な理論的遺産を遺漏なく知りつくすためにはそれは充分ではない。というのもマルクスの手になる幾千ページもの原稿、断章、抜粋、注釈が今なお印刷されることを待ちこがれているからである。

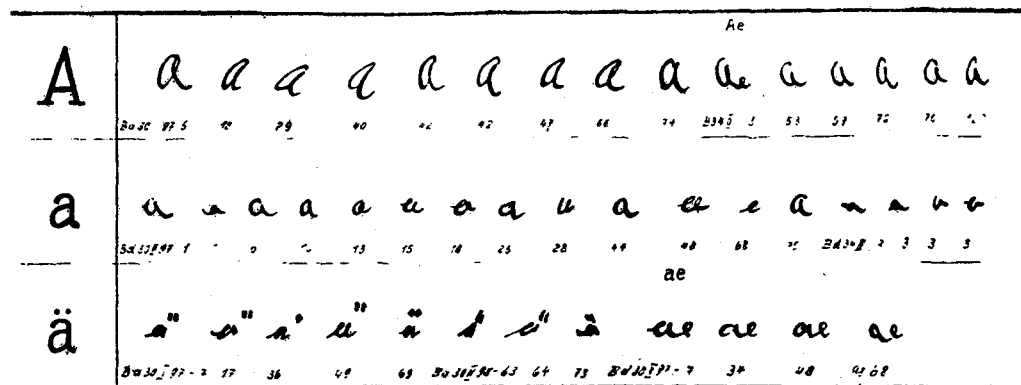
そしてマルクスとエンゲルスがずっと以前か

らレーニンと同様に世界で最も多く翻訳された著作者に数えられていることをもう少しよく考えてみるのが重要である。マルクス・レーニン主義の学問上の攻勢と呼んでいることがそこに表わされている。それにしてもどの翻訳もそれがもとの言語ともとの原稿から——“媒介語”からではなく——直接に仕上げられている場合には良い質を得ている。20カ国語<sup>3)</sup>を使用し、母国語では著作のほぼ60%しか起草しなかったマルクスとエンゲルスのような著者の場合には、メガが絶対的な完全さを追求することだけではなくて、どのテキストもマルクスとエンゲルスから受けついだままの言語と原稿で再現することは決定的な価値がある。

テキストの研究は筆跡の解読から始まる。ここでは何よりもまずそのことについて述べることにしよう。

この解読はすでに1920年代および30年代にその頃のモスクワのマルクス・エンゲルス・レーニン研究所で多くは仕上げられていた<sup>4)</sup>。当時——レーニンの指示でもあるが<sup>5)</sup>——ソヴィエトの同志たちは苦勞してしかも大きな物質的な犠牲をともなうマルクスとエンゲルスの原稿を——オリジナルかコピーかで——多くの国々からモスクワに運び集めた。これらの解読も一つの文章ごとに、一つの単語ごとに厳密に再吟味される。

この解読は筆跡——すなわちあらゆる抹消とつけ加え、欄外の目じるしと記号、文章に線が



1860—64年および1875—80年の手紙から、カール・マルクスのラテン字体の筆記体の筆跡学的分析

引かれて強調されていること、省略語と短縮語をとまなう——をごく細部にまで模写しなければならない。最後のものはそれだけで論ずべき多くのことがある。というのはマルクスとエンゲルスは一般に用いられる省略語と省略記号の使用においてもまた独自にそれらをつくり出すことにおいても真の名匠であったからである。マルクスの筆跡方法を知っているものだけが、“Uvrschtgkit”を“Unvorsichtigkeit”、“Vhasse”を“Verhältnisse”、また“Wibr”を“Weiber”と読むことができる。“D. Vßd. Arbitrksse z. Cpitlsksse entwcklt sch chaktstisch”は簡単に言えば、“Das Verhältnis der Arbeiterklasse zur Kapitalistenklasse entwickelt sich charakteristisch”ということであろう。この場合に省略語の解説はまず筆跡それ自体の解説を前提する。

これに関してメガの研究者は15年前より思いがけない助力を得た。クルト・ミュラー同志<sup>6)</sup>、ファシズムに反対した戦士であり、長年にわたってドイツ人民警察の刑事技術研究所の筆跡部門の長であった彼はその道の老練家としてその専門知識を用だてた。苦勞の多い細かな仕事によって彼は、マルクスとエンゲルスの筆跡を、ラテン字体やドイツ字体（ゴシック体）を書いたり、使ったりするときの二人の癖を、彼らの生涯における遍歴のなかで筆跡に生じた変化を研究した<sup>7)</sup>。数百にのぼる原稿から彼はマルクスの年令ごとにひとつひとつの字母と数字の代表的な書き方を濾過した。それから省略記号と省略語の分析、さらにそれらの正確な記録へと進んだ。こうしてマルクスとエンゲルスの原稿の解説のための、メガの発行者によって愛情を込めて“ミュラー入門書”と呼ばれている、ハンドブックが段々とできあがった。これはもとの犯罪研究者にして、今日80才のマルクス・エンゲルスの筆跡専門家に対するひそかな敬意なのである。

“ミュラー入門書”は不可欠の参考書ではあるが、にもかかわらず解説それ自体は解説者に最高度の要求をつきつける。しばしば原稿はコ

ピーのそのまたコピーであり、それも時おり不完全な写真技術で50年もさらにそれ以上も前に撮影されたものもある。インクが色あせ、字母の上向きおよび下向きの線が全く消え、紙が黄ばみ、よごれ、傷つけられていることもまれではない。マルクスにとって絶対必要であった葉巻きの燃えカスやインクのしみがどれほどしばしば一つの単語を消し去ってしまったことか。何十年ものあいだの紙の折り目がどれほどたやすく一つの行を読めなくしたことか。マルクスによって線を引いて消された単語や文章を再現することがどれほど困難をきわめることであることか。だがこれらすべてのことは叙述のさいのマルクスの思考の行程や最も精確で同時に文芸上の最善の表現を求める彼の理論上の格闘を知るために、そしてメガでそれを忠実に再現させるために必要なことである。

メガの巻の造本にさいして、すべての作業行程と同じように、原則的にはおもう一度検査されるこの解説の過程は筆跡のコピーをもとに行われる。貴重なオリジナル原稿を数週間も数カ月もテキストの仕上げのために利用することは無責任なことであろう。それはモスクワとベルリンの党中央文庫の金庫あるいはその他の記録保管所に可能なかぎり最適の温度、湿度、気圧の条件のもとで保管されている。しかしメガの巻の原稿が最終的に完成原稿であることが言われるまえに、原則として再度オリジナル原稿との筆跡比較が行われる。そのことは絶対的なテキストの確実さのために不可欠のことである。なぜか。

マルクスはしばしば色刷りの原稿用紙やまた色のあるインクあるいは鉛筆を用いた。コピーはしかしながら黒と白の文書である。下線を引いたり、印をつけた所が、鉛筆か、インクか、赤鉛筆であるのか、それはオリジナル原稿がはじめて確かな情報を提供する。そのことを確定することはけっして屁理窟をこねることではなくて、印をつけたり、下線を引いたりあるいは線を引いて抹消している部分が、テキストの書きおろしの時点よりも遅く行われたかどうかと

Arbeit	= Arbit = Arb/e/it = Arbeit	deutsch
Arbeiter	= Arbitr = Arb/e/it/e/r = Arbeiter	"
Arbeitsbevölkerung	= Arbitrbevölkerung = Arb/e/it/e/rbevölkerung	"
Arbeiterklasse	= Arbitrkasse = Arb/e/it/e/rk/la/sse = Arbeiterklasse	"
Arbeitslohn	= Arbeitslohn = Arb/e/itslohn = Arbeitslohn	"
Arbeitstags	= Arbitstgs = Arb/e/itst/a/g/e/s = Arbeitstages	"
Arbeitszeit	= Arbeitszeit = Arb/e/itsz/e/it = Arbeitszeit	"
Auffassung	= Auffassung = Auff/a/ssu/n/g = Auffassung	"
Anwesenheit	= Anwsheit = Anw/e/s/en/heit = Anwesenheit	"
Bedürfnisse	= Bdfesse = B/e/d/ür/f/n/isse = Bedürfnisse	"
Behauptung	= Behptug = Beh/au/ptu/n/g = Behauptung	"
Bevölkerung	= Bevölkerug = Bevölker/erun/g = Bevölkerung	"
Kapital	= Cpitl = C/a/pit/a/l = Kapital	"
Kapitalstasse	= Cpitlstksse = C/a/pit/a/l/i/st/en/k/la/sse	"
Darstellung	= Dstllg = D/ar/st/e/ll/un/g = Darstellung	"
England	= Engld = Engl/an/d = England	"
Eigentum	= Egnthum = E/i/g/e/nthum = Eigentum	"
Fortschritt	= Ftschitt = F/or/tsch/r/itt = Fortschritt	"
Folge	= Flge = F/o/lge = Folge	"

マルクスのテキストの省略語

いうことを専門家に対して認識させることができるということなのである。マルクスはしばしば非常に鋭い鋼鉄ばねをも用いており、その細い髪の毛のような線を良質のコピーであってもほとんど正確には再現していない<sup>4)</sup>。

オリジナル原稿との比較は他の理由からでも不可欠である。筆跡として提出されているすべての資料から一種の人相書きが仕上げられるとつぎに当該の巻に印刷される。このいわゆる証人の描写はマルクスによって使用された筆記用紙

の大きさ、種類、色、すかしを、筆記用具の種類と色を、資料の引き渡し状態すなわち場合によってある損傷、よごれ、テキストの紛失を、そしてもちろんオリジナル原稿の保管場所を知らせる。

たぶんそうした細かなことと外面的なことに驚いて首を左右にふる人もいるであろう。けれどもこの説明はオリジナル原稿を手にする機会のない何千人もの世界中のメガの利用者にとって興味があるだけではない。それは研究にとつ

に特に重要な価値をもっている。

例をあげよう。マルクスとエンゲルスの多くの手紙に日付けはない。しばしば手紙の内容から書かれたおよその時点を推論できる。だが時おりそれが不可能なこともある。その場合には筆跡の分析とならんで使用された紙の種類、筆記具、筆記材料がその時期の確定のために重要な役割を演じる。よく知られているように19世紀には完成した便せんや封筒やあるいは仮とじされたメモ用紙を買うことができなかった。筆記用紙は——大口の需要が前提されている場合——特定の商人から重さによって買いとった。この用紙はすかしに商人あるいは製紙工場の印をしばしばつけていた。インクにも多くの種類——黒、青、緑、紫、赤があった。インクが混ぜられることもまれではなかった。

マルクスとエンゲルスは他の人々と同じようにしばしば——残念ながらずっとそうではないが——かなり長期にわたって同じ種類の紙、同じ筆記材料を使用した。これらの情況証拠はしばしば日付けのない手紙や原稿やページづけない一葉の紙片の執筆時期を少くともそれに一層近づけて確定する根本的な手助けとなっている。科学的共産主義の創始者の思想や認識の発展を追思考しうるためにはこの種の日付けの確定が重要であることは自明である。

上記の事柄はメガの巻の成立過程で同じように大きな役割を果たしているもう一つの作業にすでにかかわっている。それは著者はだれかを調査することである。マルクス・エンゲルス全集に収録されているすべてのテキストに対し、当該の論文や手紙が一点の疑いもなくマルクスかエンゲルスの執筆したものであるという論破できない証明がもう一度される。すでに何度も印刷され普及しているテキストに対してもこの原則はあてはまる。それは当然のことである。なぜならばメガの編者はこれまでに知られていなかった世界中のマルクスとエンゲルスの筆になる論文、手紙、覚え書きを実に徹底的に捜し求めている、新たにテキストを発見した時の喜びはそれがどのようなものであっても絶大なも

のであるし、また非常にまれなことではあるが正反対の発見もあるからである。長年にわたる研究と比較により何十年間も若きマルクスの執筆とされ時期も適当であるかのように聞こえる題のついた論文 „シュトラウスとフォイエルバッハとの審判者としてのルター“ はやはりドイツの哲学者ルドヴィヒ・フォイエルバッハ自身のものであることが証明され今日に至っている<sup>9)</sup>。さらにイエーナのマルクス・エンゲルスの研究者たち<sup>10)</sup> は1874年にライプツィヒの „Volksstaat“ (人民国家) 誌上で発表された論文 „参謀部の無口なほら吹きモルトケと彼の最近のライプツィヒの文通相手“ はエンゲルスが著者ではなくて、闘争のなかでの彼の同志の1人が著者であることを明らかにできた<sup>11)</sup>。

他方でプロレタリア的な革命的な著者たちの膨大な数の新聞記事やさらにパンフレットに対して行われた国際的な調査は、これらの出版物のいくつかは共著と言ってもよいほどマルクスかあるいはエンゲルスが著者たちを下書きのさいに強く援助していたことを証明することができた<sup>12)</sup>。さらに労働者階級の科学的世界観の創始者たちは個人的な名誉より階級の利害をつねに優先していたということの新たな証拠がある。

もちろんメガの仕事場へのこの一べつは苦干の作業工程を明らかにしたにすぎない。解説と証拠の記述と著者であることの調査を含むテキストの作成は非常に重要であるが、マルクスとエンゲルスの個々の著作に関する正確な文献とその影響の歴史、広範な研究資料、各巻の内容を徹底して注解する序説も各巻の質にとってそれにおとらず決定的である。

終りに SED (ドイツ社会主義統一党) と KPdSU (ソヴィエト共産党) の委任により、同時にすべての進歩的な人間の名においてメガのこの仕事場で何らかの課題を担ってつねに働いている人々の言葉を掲げよう。たいていの場合に1巻を仕上げるのに数多くの優れた学者たちは5年間をこの仕事に費す。このことからメガの仕事は一生の仕事、天職であると言うこと

ができる。多くの編集者にとってこの職業はすでに彼らの使命となっている。とはいえこの仕事はマルクス・エンゲルスと彼らのきわめて今日の精神的遺産に対してだけでなく同時に国際的な労働者階級と世界文化に対しても当然の義務なのである。

#### 追伸

46才の、感情のうえではどちらかといえばいくぶん控え目なレーニンは次のように書いている。『私はあいかわらずマルクス・エンゲルスに、はれ込んでゐる。彼らに対するどのような中傷もけって甘んじて受け入れるわけにはいかない。いや、彼らはほんとうの人間なのだ。我々は彼らから学ばねばならない』。<sup>13)</sup>

#### 注

- 1) Marx/Engels Werke, Bd. 30, Dietz Verlag Berlin 1964, S. 377. 邦訳『マルクス＝エンゲルス全集』第30巻, 大月書店, 1972年, 301ページ。
- 2) 今日では30巻を数える。
- 3) マルクスとエンゲルスが使用した言語はつぎのとおりである。Deutsch, Englisch, Französisch, Spanisch, Portugiesisch, Italienisch, Flämisch, Latein, Griechisch, Hebräisch, Dänisch, Schwedisch, Norwegisch, Russisch, Polnisch, Tschechisch, Rumänisch, Serbokroatish, Keltisch-Irisch, Persisch, Bulgarisch, Gotisch.
- 4) Paul Weller, Franz Schiller, Nina Iljinitichna Nepomnjaschtschaja に代表される人々の働きによる。とくに Nina I. N. は44年間にわたって解読に従事した。
- 5) W. I. Lenin an D. B. Rjasanow, 2. 2. 1921. In: W. I. Lenins Briefe, Band VII: 1920-21, S. 65. 邦訳『レーニン全集』第45巻, 大月書店, 1983年, 49-50ページ。
- 6) Kurt Müller は1902年生まれで生粋の労働者出身である。最初は錠前工で反ナチの闘士, 第二次大戦後はドイツ人民警察の筆跡鑑定部門の指導者となる。彼の興味深い生涯については次号で発表する予定である。
- 7) たとえばマルクスの筆跡がドイツ字体からラテン字体へだん々と移行していくのは1850年代末からである。クルト・ミュラーによれば, それはマルクスが多くの外国文献を本格的に研究しはじめてからであろうといわれる。1873年以降マルクスはもっぱらラテン字体を用いている。
- 8) Die Herausgeber und Hersteller der MEGA: K. Marx/F. Engels „Marginalien Probestücke“ Text und Apparat, Dietz Verlag Berlin 1983, S. 9-50.
- 9) MEGA I/1, S. 68-69, S. 966-967. および Sass, Hans-Martin: Feuerbach statt Marx. Zur Verfasserschaft des Aufsatzes „Luther als Schiedsrichter...“. In: Internat. Rev. Soc. Histor. Amsterdam, 12(1967), H. 1, S. 108-119. Taubert, Inge/Schuffenhauer, Werner: Marx oder Feuerbach? Zur Verfasserschaft von „Luther...“. In: Beiträge zur Marx-Engels-Forschung. Dem Wirken Auguste Cornus gewidmet, Jg. 1973, Nr. 20, Berlin 1975, S. 32-94.
- 10) 「イエーナのマルクス・エンゲルスの研究者たち」というのは, ベルリンの Waldtraut Opitz のことである。1984年2月イエーナの Friedrich Schiller 大のマルクス・エンゲルス研究者 Herbert Schwab 教授にたずねた結果である。ゲムコー教授も1984年4月3日付の私あてへの返事でこのことを確認している。
- 11) M-E-W, Bd. 19, S. 509-511. 邦訳『マル・エン全集』第19巻, 501-503ページ。この論文に関してはつぎの文献を参照せよ。Waldtraut Opitz, Ludwig Sigismund Borkheim-Autor des Artikels, Der schweigende Stabsschreiber Moltke und sein jüngster Leipziger Korrespondent,“. In: Beiträge zur Marx-Engels-Forschung 13, Berlin 1982, S. 37-40.  
同様にエンゲルスの著とされていた „Über die Konzentration des Kapitals in den Vereinigten Staaten“. In: M-E-W, Bd. 19, S. 306-308. も彼のものでないことが明らかにされている。Vgl. Herbert Schwab „Zur Autorschaft der Notiz „Über die Konzentration des Kapitals in den Vereinigten Staaten.“. In: Beiträge zur Marx-Engels-Forschung 7, Berlin 1980, S. 47-51.
- 12) マルクスあるいはエンゲルスが下書きのさいに強く援助した著者たちとその文献はつぎのとおりである。これは私の質問に対するゲムコー教授の1985年9月4日付の返書の一部である。  
a) Aus dem Anhang MEGA-Band I/10:  
Johann Georg Eccarius: Die Schneiderei in London oder der Kampf des großen und des Kleinen Kapitals  
— Erstveröffentlichung in: Neue Rheinische Zeitung-Politisch-ökonomische Re-

- vue. H. 5/6. Mai-Oktober 1850.
- Vollständiger Nachdruck in dem von Wilhelm Liebknecht in Leipzig herausgegebenen „Demokratischen Wochenblatt“ (Beilagen der Zeitungen vom 9., 16., 23. und 30. Januar 1869, 13. Februar 1869-Nr. 2-5 und 7.)
  - Als Einzeldruck 1876 in der Leipziger Genossenschafts-Buchdruckerei unter dem Titel „Der Kampf des großen und des kleinen Kapitals oder Die Schneiderei in London“ erschienen. (Alle Angaben aus MEGA-Band I/10, S. 593-604, S. 1115-1116.)
- Für Eccarius gibt es weitere Beispiele, siehe z. B. MEGA-Band I/12, S. 629-631; S. 1163 als Erklärung dazu.
- b) *Johann Most*: Kapital und Arbeit. Ein populärer Auszug aus „Das Kapital“ von Karl Marx [Chemnitz 1873]. Eine Überarbeitung der Mostschen Schrift erfolgte durch Marx im August 1875 (auf Anregung Liebknechts und Bitte Mosts). Von Marx neu geschrieben u. a. Abschnitte über „Ware und Geld“, „Der Arbeitslohn“, Überarbeitung in terminologischer und parteilicher Hinsicht, wissenschaftliche Argumentation usw. Resultat:
- Johann Most*: Kapital und Arbeit. 2. verb. Auflage, Chemnitz [1876]
- (Alle Angaben über die Bedeutung der Schrift, Marx' Anteil, Daten u. a. siehe Hannes Skambraks: „Das Kapital“ von Marx-Waffe im Klassenkampf, Dietz, Berlin 1977, S. 194-200 und die entsprechenden Fußnoten).
- (Wird erscheinen im MEGA-Band II/8.)
- c) *Aus dem Anhang MEGA-Band I/24*:  
*Friedrich Leßner*: „Honest“ John Hales In: The International Herald. Nr. 41, 11. Januar 1873. (MEGA I/24, S. 443-445, S. 1181-82)  
*Samuel Vickery*: To the Editor of The Eastern Post. In: The Eastern Post. Nr. 230, 22. Februar 1873. (MEGA I/24, S. 448-450, S. 1196)
- 13) W. I. Lenin an J. F. Armand, 30. 1. 1917. In: Lenins Briefe, Band IV: 1914-1917, S. 376. 邦訳『レーニン全集』第35巻, 大月書店, 1983年, 298ページ。
- 追白  
 本文にある「ドイツ字体」および「ラテン字体」はそれぞれ「カメの甲文字体」および「ローマ字体」と考えられる。なお注4), 6) についてはつぎの興味深い文献を参照されたい。
- H. Stern/D. Wolf: Das große Erbe, Dietz Verlag Berlin 1972. 池田光義氏訳『偉大な遺産』大月書店, 1983年。(訳者)
- (昭和61年2月21日受理)